

「新島襄の演説」

参考著書「ころを動かすマーケティング」魚谷雅彦 ダイアモンド社

新島襄は安中藩、今の群馬県の下級武士の子供として江戸で生まれ、江戸の安中藩邸で育っています。本名は新島七五三太（しめた）。変わった名前ですが、新島襄には姉が四人います。ようやく生まれた跡取り息子の誕生に、祖父が「しめた！」と言った言葉が、そのまま名前になったという逸話が残っています。おそらく可愛がられたことでしょう。腕白に生き生き育ったようです。そして藩校でオランダ語を学んでいる時、彼は外国に強い興味を持つことになります。そこに、ペリーの黒船がやってきて、江戸は大騒ぎに。アメリカという振興の発展国を見てみたい、キリスト教を知ってみたいと彼は思いました。しかし、当時は鎖国の時代。外国に行くのは禁令です。もし脱国したことが見つければ、死罪という厳しい規制がありました。

それでも、新島襄はアメリカ行きを試みるのです。たくさんの人に手助けをしてもらい、函館沖に停泊していたアメリカの船に乗り込むことに成功しました。一人の日本の侍が、夜陰に紛れてアメリカの船に飛び乗ったのです。ところが、この船はアメリカではなく、上海に行ってしまいました。それでも新島襄はひるみません。アメリカのボストンに向かうワイルド・ローバー号を見つけ、乗せてもらうのです。そして上海から一年かけて、とうとうボストンにたどり着きました。何かのつてがあったわけではありません。それこそ日本人なんているはずもない。アメリカに着いたものの、彼は途方に暮れました。しかし、日本人なんて珍しい、と地元で人の噂になったのでしょう。船会社のオーナーのアンドリュー・ハーディーが新島襄に会ってくれました。そして、アメリカで学んでみたい、だからはるばる日本からやってきたのだ、という彼の志に打たれて、縁もゆかりもない日本人をジョセフと命名し、養子にして教育を施してくれることになりました。新島はアメリカで暮らし、アメリカで学び始めます。ボストン郊外のアーモスト大学に入学。やがて、宣教師になる資格を得て、世界に派遣されることになりました。新島が向かう事になったのは、もちろん日本。プロテスタントの布教をするというミッションを与えられ、10年ぶりに日本を目指すことになりました。

この時、出発に先がけ宣教師たちは全員が自らの決意を語るスピーチを、教会で一人ずつ壇上に上がって行います。新島襄も、アメリカに来て、アメリカの両親に育ててもらった感謝の言葉と、日本で布教活動をするという決意を原稿にしたため、スピーチの順番を待っていました。

ところが壇上に上がった途端、彼はそのすべてを忘れてしまうのです。そのとき出て来たのは、原稿に書いた通り一遍の言葉ではない、心からの言葉でした。アメリカという国にはすばらしい教育があった。しかも、自分のような外国人を養子にしてくれる、温かい心を持った人たちがいた。一方、日本はまだ教育レベルが低い。一部の武士は教育を受けられるが、多くの人は何も学べない。これからの日本の国づくりには、若者に教育がなければいけない。私は教育を通じて、日本の国づくりに貢献したい。それが自分が生きてきた意味ではないかと気づいた……。アメリカ人への感謝と日本への思いで感極まり、涙ながらに新島襄は続けました。布教活動も大切だと思う。

でも、自分は教育施設をつくりたい。
キリスト教精神に基づく、自分を学ばせてくれたような社会をつくれる、良心溢れる青少年を育てたい。
そして日本を変えたい・・・。
心から出てきた言葉は、人の心を打ちます。
そこには州知事などたくさんのアメリカ人がいましたが、彼らが感動し、次々に手を上げたのです。
「私はあなたの思いに打たれた。あなたに寄付をしたい」
私はいくら、私はいくら、とあちこちから上がる手を見ながら、感激した新島は涙にくれました。
中には家に帰るための自動車賃2ドルを新島に託す老人もいました。

**この逸話、感動しますね。
アメリカという国の器の大きさを感じます。**

「志」という言葉

自分が生きて来た「意味」

そこが明確となると強い使命感となるのでしょうか。